

第 章 附属自然環境教育センター

1 . 理念・目的

近年地球規模の環境問題として、二酸化炭素をはじめとする温室効果ガスの増加に伴う地球の温暖化、オゾン層の破壊、森林減少などがクローズアップされるとともに、生活様式の変化に伴う水質汚濁、大気汚染などの公害問題が世界的な課題となっている。そのため、学校教育現場においては環境教育の指導内容が充実されることとなり、自然環境に関する教育の重要性が増大してきた。

一方、受験戦争等から学生や生徒が知識偏重に陥り、自然の中での生活体験や野外活動がおろそかにされてきた。そのため、自然における経験や感動が乏しく、その結果、身近な自然への関心も薄くなり、これらが学生や生徒の自主性の欠如を引き起こしていると指摘されるようになった。しかし、学校教育の現場における自然環境教育への本格的な取組は始まったばかりで、十分に体系付けられておらず、今後、重要性が増すことになると思われる自然環境教育実践指導者の育成が急務となってきている。

このような社会的要請に応えるため、かつての附属演習林と附属農場を改組して、「自然環境教育センター」が平成6(1994)年6月24日に設置された。そこは「自然環境教育」についての理念の確立、内容の精選と体系化、教育実践の方法などに関する教育研究を行うとともに、自然環境教育センターにふさわしい自然環境を作りだし、それを管理すること、教員養成大学として教員志望の学生はもちろんのこと、現職教員への教育を通して実体験に裏付けされた知識と理論を基礎とした実践力豊かな自然環境教育指導者を養成すること、児童や生徒、一般の人々に対しても施設を開放し、公開講座などを行うことを目的としている。

2 . 現状

(1) 組織

自然環境教育センターの専任教員は教授1、准教授1の2名であり、奈良実習園では会計課総務・決算担当の週30時間の非常勤技術職員2名、奥吉野実習林では人材派遣会社からの技能補佐員1名が従事している。事務は、会計課係長(総務・決算担当)が兼務している。奥吉野実習林の技能補佐員は、奥吉野実習林と併設されている講義研究棟と宿泊施設の管理補佐を業務としている。

自然環境教育センターは、運営委員会と事業推進委員会を有する。運営委員会は、センター長、センター専任教員、3名の兼務教員、教育系・文科系・理科系・芸体系から互選された教員各1名、各附属学校から選出された教員各1名で構成され、運営の基本方針、予算、教育・研究、諸規定の制定及び改廃に関する事項を審議する。事業推進委員会は、

・ 附属自然環境教育センター

センター長、センター専任教員、3名の兼務教員、その他センター長が指名した3名の教員で構成され、教育・研究の年次計画の立案及び実施、研究会・公開講座等の企画及び実施、研究紀要等の編集及び発行に関する事項を審議する。

	運営委員会		
センター長		教育研究部門	奈良実習園
		開放部門	奥吉野実習林
	事業推進委員会		

(2) 施設・設備

自然環境教育センターは、本学から南へ徒歩で15分の奈良実習園と、本学から南へ約90Kmの距離、車で3時間を要する奥吉野実習林からなる。

奈良実習園は約110アールの面積を持ち、講義室、実習室等を有する管理棟(4.7a)、耕作地(84.2a)、花壇・池(3.0a)、温室(0.7a)、パンライトハウス(0.9a)、農道その他(19.8a)からなる。

奥吉野実習林は、標高400mから1,200mに至るブナやミズナラの大木からなる原生林、所々にトチやモミ等の巨木を混じえる落葉広葉樹林、スギやヒノキの造林地など約176ヘクタールの面積を持つ。また、平地部には教育研究棟(3.5a)と40名が宿泊できる施設(大塔寮、2.43a)がある。教育研究棟は、事務室、演習・図書・応接室、観測室、木材工作室、標本室、研修室、実験室、講義室などからなる。宿泊施設は、男女各々のベッドルーム、2つの和室、食堂兼休憩室、厨房室、男女各々のシャワー室などからなる。

ちなみに、センター本部は奈良実習園に設置されているが、センター専任教員は奈良教育大学構内の研究室に勤務している。

(3) 教育研究及びそれに関する諸活動(平成18(2006)年度)

- 1) 奈良実習園における教材用各種作物の栽培(ソバ、マメなど)
- 2) 奈良実習園で育てたタマネギの苗とハボタンを地元民などに販売
- 3) 奈良実習園の花木園、教材用果樹園、ガラス温室、花壇と池の管理
- 4) 近畿地区教員養成大学農場等協議会参加
- 5) 『奈良教育大学附属自然環境教育センター紀要』第8号発行
- 6) 『自然と教育』第17号発行
- 7) センター主催の公開講座など

「米作り体験教室」(奈良実習園、小学生・親43名)

第1回(田植え)、第2回(稲刈り)、第3回(もちつき)

「夏の森を楽しもう」(2泊3日、奥吉野実習林に於いて、親子8組21名)

自然教室「チーズ作り」

第1回目(参加者12名)、第2回目(参加者10名)、第3回目(参加者6名)

8) センター施設利用状況

奈良実習園で行われた学生の授業や実習

栽培実習、幼児と環境、総合演習、環境教育、生活科教育演習、生活科教育

特講、身近な自然学、生物学実験

奥吉野実習林で行われた学生の授業や実習

教科「生活」集中授業、生物学野外授業、野外生活

奥吉野実習林を利用した大学外の団体などによる研究、集会活動

日本大学生物資源科学部野外調査、檀原市昆虫館友の会、全国学校農場協会・

全国高等学校農場協会

奥吉野実習林を利用した公開講座など

「夏の森を楽しもう」（自然環境教育センター公開講座）

奥吉野実習林の観察会、合宿、キャンプ、セミナー、その他の利用

観察会（9回19日）、合宿、ゼミなど（7回18日）、清水峰登山（多数）

9) 奈良実習園利用状況

附属学校の奈良実習園での実習

附属幼稚園によるヨモギ摘み、附属幼稚園園児によるジャガイモ掘り、附属幼稚園園児によるサツマイモ掘り、附属小学校児童による苗代の観察、附属小学校児童によるサツマイモの栽培と収穫、附属小学校児童による米作り体験
その他の学校などによる奈良実習園でのイモ掘り、実習

奈良市内幼稚園によるサツマイモ掘り（7幼稚園）、奈良市内幼稚園園児によるジャガイモ掘り（1幼稚園）

卒業研究など

身近で役立つ薬効植物 アロエの利用から（社会科教育研究室）、ソバから広がる栽培学習の教材研究（理科教育研究室）、無農薬有機栽培の実践及び生ゴミ堆肥作り（環境教育コース地域環境専修）

シカによるイラクサの忌避性に関する研究（センター協力研究員による）

公開講座、自然教室

米作り体験教室 3回、自然教室「チーズ作り」2回

センター協力研究員による研究活動

シカによるイラクサの忌避性に関する研究

NPO法人などの団体による奈良実習園の利用

社会福祉法人「ならのは倶楽部」の高齢者施設利用者と施設スタッフによる園芸活動（4日）、特定非営利活動法人「奈良NPOセンター」企画「もうひとつの学び舎」の食農教育プログラム「ソバ、野菜の栽培」（8日）ボランティアサークル「なかよし広場」（西ノ京養護学校）（5日）

授業での利用

幼児と環境、社会科教育演習、環境教育、総合演習、身近な自然学、栽培実習、生物学実習

その他

学生サークル キラキラ座（18日）

(4) 地域社会への寄与や連携活動

上記の諸活動として紹介した中から、この課題に関する部分を抜粋する。

・附属自然環境教育センター

- 1) センター主催の公開講座など
 - 「米作り体験教室」(奈良実習園にて3回、県内小学生と保護者43名)
田植え、稲刈り、もちつき
 - 「夏の森を楽しもう」(奥吉野実習林にて、2泊3日、一般親子8組21名)
 - 「チーズ作り」の自然教室(奈良実習園で計3回9日間、一般合計28名)
 - 2) 地元民に奈良実習園で育てたタマネギの苗、ハボタンを販売
 - 3) 奈良実習園の地域社会への寄与
 - 奈良市内幼稚園園児によるジャガイモ掘り(1回、48名)
 - 奈良市内幼稚園園児によるサツマイモ掘り(7幼稚園、686名)
 - 4) 奥吉野実習林の利用
 - 日本大学生物資源科学部による野外調査
 - 橿原市昆虫館友の会による森林再生事業についての研究会
 - 全国学校農場協議会・全国高等学校農場協会による第49回農業実験実習講習会(グリーンライフ)における自然観察会
 - 5) 他団体などによる自然観察会など(8団体、20日、197名)
 - 6) NPO法人などの団体による奈良実習園の利用
 - 社会福祉法人「ならのは倶楽部」の高齢者施設利用者と施設スタッフによる園芸活動(4日)
 - 特定非営利活動法人「奈良 NPO センター」企画「もうひとつの学び舎」の食農教育プログラム「ソバ、野菜の栽培」(8日)
 - ボランティアサークル「なかよし広場」(西ノ京養護学校)(5日)
- (5) 情報公開、広報・ニュース発行等
- 1) 『奈良教育大学附属自然環境教育センター紀要』第8号発行
 - 2) 広報誌『自然と教育』第17号発行

3. 自己評価と改善の方策(平成18年度を中心に)

平成18(2006)年度において、奥吉野実習林や奈良実習園は、前述のとおり学内外の多くの人の利用があった。また、『奈良教育大学附属自然環境教育センター紀要』と『自然と教育』を発行したことは、これまでとほぼ同様の活動ができたと評価されよう。

地域社会への貢献としては、ここ数年の傾向として、NPO法人や社会福祉法人、ボランティアサークルなどに利用され始めたことは注目に値する。また、児童とその保護者を対象とした2件6日に及ぶ公開講座、3件9日に及ぶ自然教室、実習林での本学以外の団体からの数多くの観察会をはじめ、地域住民へのタマネギの苗やハボタンの販売は地元で好評を博しており、自然環境教育センターとしての地域社会への貢献は非常に高いと考えている。

さらに、本学附属幼稚園に加えて、奈良市内の幼稚園園児によるジャガイモ掘りが1園、

サツマイモ掘りが7園あったことは、イノシシによるサツマイモの食害に因り数園のイモ掘りを断わらざるをえなかった点を考えるとその利用頻度は高く、特筆されるべきである。

本学外の団体による自然観察などでの奥吉野実習林の利用は、毎年定着しており、一般の人に好評である。さらに数年前からは、本実習林の最高峰の清水峰への登山が増えており、これも社会的貢献に当たるであろう。

以上をまとめると、専任教員2名、及び2名の週30時間の非常勤技術職員、実習林の週30時間の派遣社員からなる自然環境教育センターとしては、これらの活動は十分なものであり、高い評価を受けるべきであろう。また、地域に開かれた大学を目指す本学の理念を、具体的に行動に示したものと言える。

このような努力や地域社会への貢献は、学外における高い評価にも関わらず、本学内では十分に知られていない。これは、環境教育の必要性が声高に叫ばれているにも関わらず、自然環境教育センターの趣旨や目的に対して、必ずしも学内に周知されているとは言い難い。あるいは学内への広報不足とも言えるが、自然環境教育センターでは、常日頃の活動に追われ、時間を割く余裕を持ち得ない現状がある。

奥吉野実習林は、従来、猟期(11月15日から2月15日)には猟銃を使用した猟が認められる猟場の一部となっていた。広範囲の利用を呼びかけておきながら、自然環境教育センター内で死亡事故になる恐れのあることが行われていた。そのため、奥吉野実習林のある旧大塔村に働きかけ、最近になってようやく禁猟区に指定された。

以上の広範囲の活動に対し、平成18(2006)年度から技術系職員が週30時間勤務となったため、現在、奈良実習園では週30時間の非常勤職員のみ体制となっている。勤務体制にあわせて、業務の縮小を心掛けてはいるが、それでも活動量が多い現状は否めない。

これらのことから、奈良実習園では従来どおり技術系職員2名の体制が望まれる。また、奥吉野実習林においても週30時間の派遣社員が勤務しているが、技術職職員の定員化も求められる。

また、自然環境教育センターの中心は奈良実習園であるが、施設は老朽化し、講義室は30名、実習室は10名程度の広さである。したがって、公開講座などでは参加者に窮屈な思いをさせている。さらに、耐震構造についても不安が残り、トイレは男女共用の旧式である。研修室や講義室の拡充とともに、これらを改築し、自然環境教育センターの核とされることが望まれる。

4 . 中期目標・中期計画との関係とその成果

自然環境教育センターの中期目標・中期計画に関することは、まず、「3 その他の目標 (1) 社会との連携、国際交流等に関する目標を達成するための措置」にある。具体的には、この中の「地域社会等との連携・協力・社会サービス等に係わる具体的方策」であり、このことは、自然環境教育センターの設置目的にもある「社会への貢献」に該当し、センターの各種活動の中心になるので、十分その成果を挙げていると言える。

・ 附属自然環境教育センター

また、Ⅴ．自己点検・評価及び当該状況に係わる情報の提供に関する目標の「２ 情報公開等の推進に関する目標」に関しては、『奈良教育大学附属自然環境教育センター紀要』と情報誌『自然と教育』の発行により、達しているといえる。

5 . 資料一覧

本文に含めなかった過去5年の根拠資料として、下記のものを用意している。

参考資料 8 - 1 : 『自然環境教育センター事業報告』平成 14 年度～18 年度

参考資料 8 - 2 : 『奈良教育大学附属自然環境教育センター紀要』第 6 号～第 8 号

参考資料 8 - 3 : 『自然と教育』第 14 号～第 17 号